

平城宮転用硯の実態

1 はじめに

平城宮からは、これまでの発掘調査で550点を超える陶硯（定型硯）が出土している。これら2005年度までに出土した陶硯530点については、『平城京出土陶硯集成Ⅰ－平城宮跡－』（奈文研史料第77冊、2006）として報告済みである。

平城宮においても食器を転用した硯が数多く出土しており、その数量は看過できないほどである。にも関わらずその実態について、これまで十分に報告してきたとは言いがたい。食器として報告される中で、硯に転用した痕跡の有無を述べるにとどまる場合がほとんどであった。

本稿では、文書行政の中心であった平城宮で、どのような転用硯が出土しているのか紹介したい。

2 兵部省での定型硯と転用硯の比率

平城宮内の報告書で、定型硯と転用硯の比率を計測したのは兵部省地区のみである。その背景には、平城宮の中では、陶硯の量が比較的少なかったことが挙げられる。

推定兵部省内の包含層などから出土した定型硯は7点、転用硯は57点である。それらの詳細な出土位置は、図70に示すように建物の外郭付近に分布し、両者の出土傾向は整合的である。すなわち、これらは兵部省で用いられた硯の実態をある程度示すと考えられる。転用硯の種類は、須恵器杯B蓋が6割程度、甕片が約3割、杯皿類が約1割を占める。

ちなみに、兵部省の西側を流れる基幹排水路SD3715からは、定型硯は出土しておらず、転用硯が180点出土している。その内訳は須恵器杯B蓋が約7割、甕片が約2割である。

3 器種ごとの須恵器の転用硯

杯B蓋 転用硯のなかでも、もっとも数量的に多い。ひっくり返した内面を硯として使うのが一般的で、あきらかにつまみをうち欠いたものもある。つまみが残るものも少なからずあり、これらは下に杯を置くなどして、水平に設置したのであろう。あきらかに古相のかえり付きの蓋や、壺A蓋を用いたものもある。

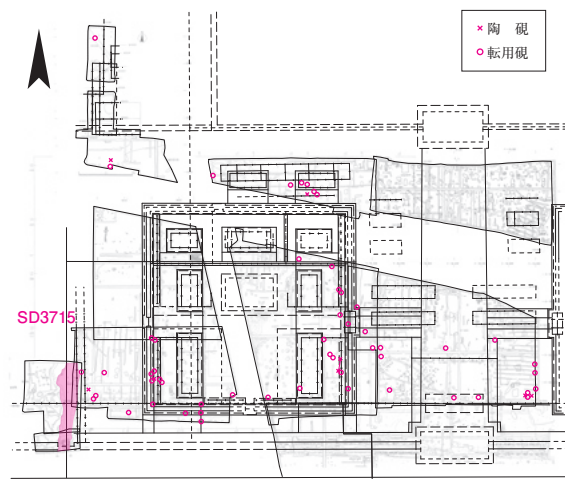
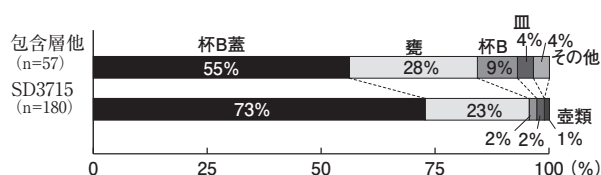


図70 兵部省から出土した転用硯の種類と出土地点
(下図は『平城報告XVI』図95より)

杯 B 高台をもつ杯Bは、ひっくり返して底部を用いる例が多い。平坦面を確保しやすく、硯に転用しやすいように思えるが、出土する点数はそれほど多くない。おそらく、高台が低い場合墨が流れ出てしまい、少量しか墨を溜めることができなかったのではなかろうか。

杯A・皿A・皿C 無台で平底の杯皿は、底部内面を使用する例が多い。内面に墨痕がつくのみで、研磨痕が明瞭でないものは、これまでもいわれているように溜った墨を溜めて使用した可能性もあろう。

甕 片 転用硯のなかでも、須恵器甕の破片を利用した硯が注目される。平城宮から出土した円面硯では、硯面径30cm前後のものが最大級であるが、そのような大型の円面硯に匹敵するような須恵器甕の転用硯が出土している（図71）。

1は、兵部省の西側、SD3715（平城第157次）から出土した。最大長29cmを測る。円弧の曲線から、直径1m近い須恵器甕の胴部片と推定できる。外面は平行タタキが残り、内面は無文当て具とみられるが、硯としての使用により当て具痕が摩滅した可能性もある。全体に墨が残り、破断面にも墨が付着することから、硯として使った大きさを反映しているとみてよからう。

2は、東方官衙地区（平城第429・440次）の大土坑SK19189・19190から出土した。最大長27cmを測る。1

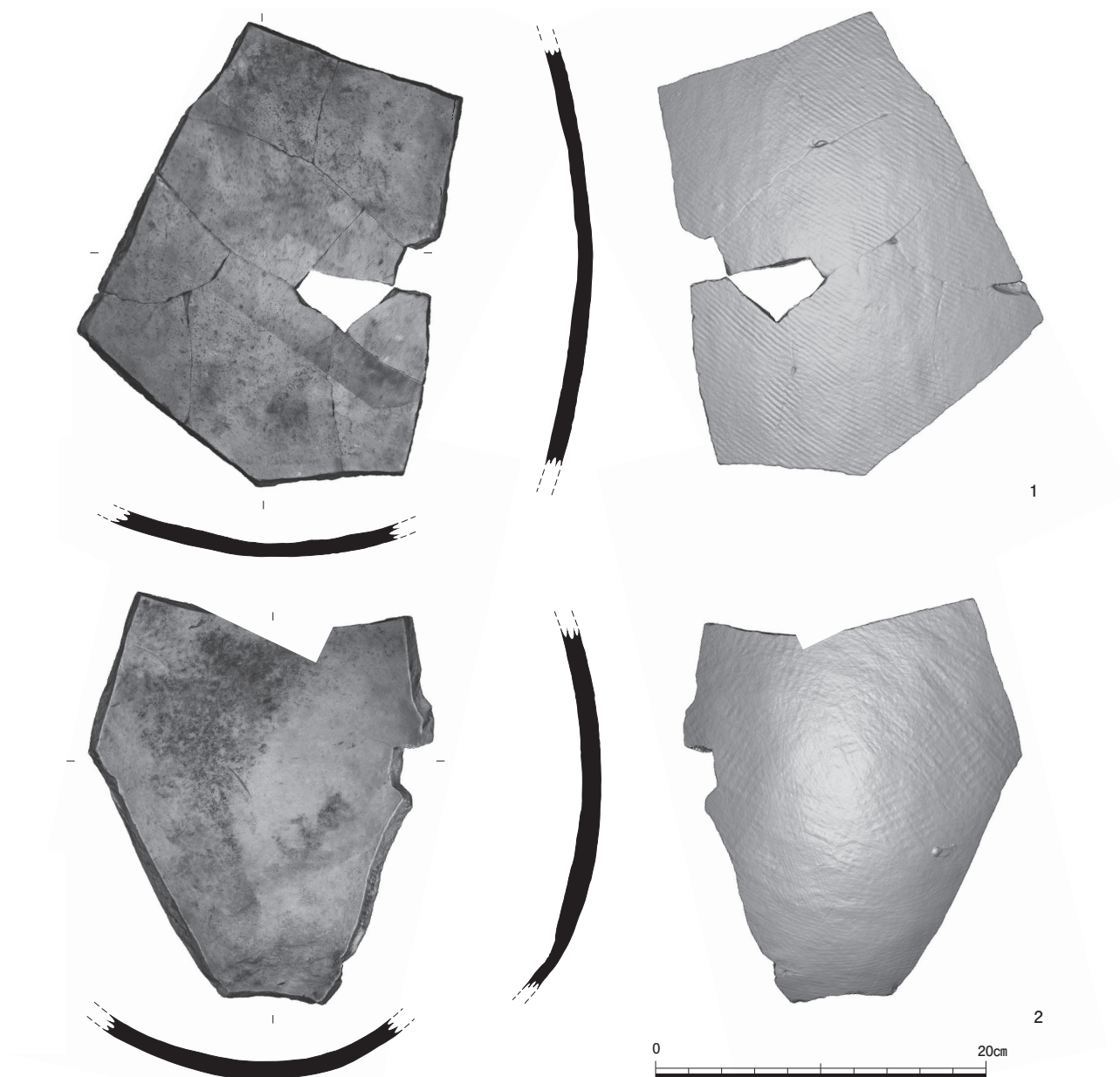


図71 須恵器甕片を用いた大型の転用硯¹⁾ (1:4)

に比べ、やや小型の甕であろう。外面は格子タタキ、内面は同心円の当て具痕が残るが、使用により内面の当て具がほぼ摩滅している。やはり破断面にも墨が付着することから、転用硯として使用された形をある程度、反映していると考えられる。

4 まとめ

平城宮では定型硯の多さに目を奪われがちであるが、実際には定型硯を凌駕する量の転用硯が出土しており、そのあり方は、地方官衙の様相と基本的に同じなのかもしれない。

平城宮・京から出土した定型硯には、管見では朱墨を用いたものはない。しかし、点数は少ないながら、朱が

付着する転用硯は、各所で出土している。朱用硯のあり方が示すように、定型硯と転用硯は、補完的な関係でもあるといえる。また、今回は須恵器のみ取り上げたが、墨痕や習書がある土師器杯皿類には、墨を擦ったような摩滅の痕跡が観察できる資料があり、これらも平城宮の硯事情を考える上で看過できない。

今後、詳細に転用硯と定型硯の出土状況を細かく検討することで、より実態に近い官人の硯事情があきらかになるはずである。本稿がその嚆矢となれば幸いである。

(神野 恵)

註

- 1) オルソ画像作成は、遺跡・調査技術研究室客員研究員の
中村亜希子による。